

『井筒』 上演詞章

詞章

1 「名ノリ笛」

〈名ノリ〉

ワキ「これは一所不住の僧にて候、われこの程は南都みなとに候ひて、靈仏れいぶつ靈社れいしゃ拜み巡りて候、またこれより初瀬はつせ詣まじりと志し候、あれなる寺を人に問へば、在原寺とかや申し候ふほどに、立ち越え一見せばやと思ひ候

〈サシ〉

ワキ「さてはこの在原寺は、いにしへ業平紀の有常の息女、夫婦住み給ひける石上なるべし、風吹けば沖つ白波なみ竜田山と詠じけんも、この所にての事なるべし

ワキ「昔語りの跡訪へば、その業平の友とせし、紀の有常の常なき世、妹背をかけて申はん、妹背をかけて申はん

2 「次第」

〈次第〉

シテ「暁あけごとの關伽せきかの水、暁ごとの關伽の水、月も心や澄ますらん

〈サシ〉

シテ「さなきだに物の淋しき秋の夜の、人目まれなる古寺ふるでらの、庭の松風まつかぜ更け過ぎて、月も傾く軒端のきばの草、忘れて過ぎしいにしへを、忍ぶ顔にていつまでか、待つことなくてながらへん、げに何事も思ひ出の、人には残る世の中かな

〈下ゲ歌〉

シテ「ただいつとなく一筋に、頼む仏のみ手糸、導きたまへ法の声

シテ「聞こえは朽ちぬ世語りを

ワキ「語れば今も

シテ「昔男の

地「名ばかりは、在原寺の跡古りて、在原寺の跡古りて、松も老いたる塚かぶつの草、これこそそれよ亡き跡あとの、ひと叢むら薄うすの穂ほに出づるは、いつの名残りなごりなるらん、草茫茫むらむらとして、露つゆ深々と古塚ふるかぶつの、まことなるかな古への、跡懐かしき気色かな、跡懐かしき気色かな

〈□〉
ワキ「なほなほ業平紀の有常の息女のおん事、詳しくおん物語り候へ

〈クリ〉
地「昔在原あひらのの中將なかつら、年経としへてここに石上いそのかみ、古りにし里も花の春、月の秋として住み給ひしに

〈サシ〉
シテ「その頃は紀の有常が娘と契り、妹背いもせの心浅からざりにしに

地「また河内の国高安の里に、知る人ありて二道に、忍びて通ひたまひしに

シテ「風吹けば沖つ白波なみ竜田山

地「夜半にや君がひとり行くらんと、おぼつかなみの夜の道、行くへを思ふ心とげて、よその契りはかれがれなり

シテ「げに情け知る、泡沫うたへの

現代語訳

1 僧の登場

一所不住の旅の僧が南都から長谷寺へ赴く途中で業平ゆかりの在原寺に立ち寄る。

僧 わたくしは一所不住の僧です。わたくしは、このところ南都におりましたが、南都の靈仏靈社はすべて参詣いたしました。また、これから長谷寺に参詣しようと思ひます。

ところで、むこうの寺を人に尋ねてみたところ、在原寺とか申しますので、立ち寄つて、一見におよぼうと思ひます。

さては、この在原寺は、その昔、業平と紀の有常の息女夫婦が住んでいらつしやつた石上なのですね。その紀の有常の息女は、「風吹けば沖つ白波竜田山…」と詠んだと聞いていますが、それはこのことなのですね。

その昔の物語の跡に来てみると、物語の主である業平と、業平が友としていた紀の有常の息女は、無常の世の習わしで、すでにこの世の人ではありません。それでは、夫婦をいっしょに弔うことにしよう。

2 里女の登場

水桶を手にした里女が、思い出から逃れたいと願いつつ寺にやって来る。

里女 こうして、毎日、夜半時に仏に供えるための水には、水に澄んだ月影が映つて、わたしの心も澄まされるようです。

ただでさえ物寂しい秋の夜、この人影もまばらな古寺の庭には松風が吹き、夜も更け、

月も西の空に傾き、古寺の傾きかけた軒端には忘れ草が生えています。昔のことは忘れようとして過ごしてきましたが、その昔を思いつつ、いつたいつまでこうして人目を忍んで、

〈上ゲ歌〉

シテ「迷ひをも、照らさせたまふおん誓ひ、照らさせたまふおん誓ひ、げにもと見えて有明あきの、行くへは西の山なれど、眺めは四方よもの秋の空、松の声のみ聞こゆれども、嵐あらしはいづくとも、定めなき世の夢心、何の音にか覺めてまし、何の音にか覺めてまし

3 問答

ワキ「われこの寺に旅居して、心を澄ます折節に、女性一人来たりたまひ、これなる板井いたいを結び花を清め香を焚き、あれなる塚に回向えんぎやうなしたまふは、いかなる人にてましますぞ

シテ「これはこのあたりに住む者なり、この寺の本願ほんげん在原の業平は、世に名を留めし人なり、さればその跡のしるしもこれなる塚の蔭かげやらん、われはも詳しくは知らず候へども、花水を手向けおん跡を弔ひ参らせ候

ワキ「げに在原の業平は、世に名を留めし人なりさりながら、今はあまりに速き世の、昔語りの跡なるを、かやうに弔ひたまふこと、その在原の業平に、いかさまゆゑあるおん身やらん

シテ「故ある身かと問はせ給ふ、その業平はその時だにも、昔男といはれし身の、ましてや今は速き世に、故もゆかりもあるべからず**ワキ**「もつとも仰せはさることなれども、こは昔の旧跡にて**シテ**「まこそ遠く業平の**ワキ**「跡は残りてさすがにいまだ

地「あはれを述べしもことはりなり

〈クセ〉

地「昔この国に、住む人のありけるが、宿を並べて門かどの前、井筒に寄りてうなみ子の、友達語らひて、たがひに影を水鏡みづきやう、面おもてを並べ袖を掛け、心こゝろの水も底ひなく、移る月日も重なりて、おとなしく恥ぢがはしく、たがひに今はなりなりにけり、そのちかめま男、言葉の露の玉章たまぢやうの、心こゝろの花も色添ひて

シテ「筒井筒、井筒にかけしまろがたけ、**地**「生ひにけらしな、妹見いもみざる間にと、詠みて贈りけるほどに、その時女もくらべ来し、振り分け髪も肩過ぎぬ、君ならずして、誰か上ぐべきと、たがひに詠みしゆゑなれや、筒井筒の女とも、聞こえしは有常が、娘の古き名なるべし

5 朗キ

地「げにや古りにし物語、聞けば妙なる有様の、怪しや名のりおはしませ

シテ「まことはわれは恋ひ衣ころも、紀の有常が娘とも、いさ白波しろなみの竜田山、夜半に紛れて来りたり

地「不思議やさては竜田山、色にぞ出づるもみぢ葉みぢはの

シテ「紀の有常が娘とも

地「または井筒の女とも

シテ「恥づかしながらわれなりと

地「言ふや注連ぬりぞ繩なまの長き世を、契りし年は筒井筒、井筒の陰に隠れけり、井筒の陰に隠れけり

あてもなく生き永らえてゆくのでしょうか。まったく、人には何であれ、思い出というものが残るもので、それが世の中というものなのです。

そうした思いを振り切つて、常時ひたすら阿弥陀仏のお導きを頼みにして、念仏に励むことにいたしましたしょう。

わたくしたち衆生の迷いを晴らしてくださるという阿弥陀仏のご誓願は本当だと思われて、夜半の月が阿弥陀仏のおわします西の山に隠れようとしています。月の行方は西の空ですが、秋の景色は四方の空に広がっています。その空からは松風の音だけが聞こえますが、吹いてくる風の方向は定かではありません。その風のように、わたくしはこの定めなき世で迷っているのですが、この迷いは何によって寛ませばよいのでしょうか。

3 里女、僧の応対

僧が里女に素性を訊ねると、里女は僧を業平の墓がある塚に案内して、深い感慨にひたる。

僧 この寺に休息して、心を澄ませていると、一人の女性がやつてこられ、板で囲つた井戸から水を掬いあげ、仏に供える花を清め、香を焚いて、あの塚に手向けをしていらつしやる。あなたはいかなるお人ですか。

里女 わたくしは、このあたりに住む者でございいますが、この寺を創建された在原業平は、いまにいたるまでその名を知られている有名な方でございます。ですから、この塚の蔭がその墓じるごしいと思います。わたくしも詳しくは存じませんが、花や水を手向けて、このように弔い申しているのです。

僧 なるほど、在原の業平はいまの世にまでその名を知られている方です。しかし、それはいまからははるかに遠い時代の物語です。その旧跡を、このように弔われているのは、もしや業平にゆかりのあるお方でしょうか。

里女 業平とゆかりの者かとお尋ねですが、その業平は生前から「昔男」と言われていたお

のでございます。まったく、夫婦男女の仲を取り持つのは歌ですから、その歌で自身の思いを述べたのはもつともなことでした。

ところで、昔、この石上に家を並べて住んでいた人がいましたが、その家の子供同士が、家の前にあった井戸に寄り、たがいに誘い合つて、井桁に顔をならべ、袖を重ねて、井戸に映る姿を見ては遊んでいました。そうして、心の隔でもなく仲むつまじくしているうちに、年月も経過して、二人とも成人して、おたがいに相手を意識するようになりました。その後、その男は誠実に、美しい言葉で心もこめて、「筒井筒井筒にかけしまろが丈生にけらしな妹見ざるまに」と詠んで贈つたところ、女のほうからも、「くらべ来し振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき」と返歌をして、こうしてたがいに歌を詠み交わしたのです。それゆえ「筒井筒の女」とも言われている女は、ほかでもありません、昔の有常の娘の名前なのです。

5 里女の中入

里女は僧に素性を訊ねられて、紀の有常の娘であると明かし、また、井筒の女とも言われていると言つて井筒の蔭に消える。

僧 なるほど、昔の物語を聞いていて気づいたのですが、不審なことに、おん身はずいぶん優雅なたたずまいでいらつしやる。いったい、おん身はどなたなのでしょうか。

里女 じつは、わたくしはいまも業平を恋っている紀の有常の娘…、いやいやそんなお方は、わたくしは存じませんが、ともあれ、業平の妻が「竜田山夜半にや君が一人行くらんと」と詠んだように、夜半にまぎれてやつて来たのです。

僧 これは不思議なこと。さては、竜田山の紅葉葉のように、はつきりと姿を現わされたのですね。

里女 そのとおり、わたくしは紀の在常の娘でございます。

（次項へ続く）

僧 あなたはまた、「井筒の女」とも言われていますね。
里女 ええ、恥ずかしながら、それもわたくしのことです。
里女はそう言ったかと思うと、十九の年に永遠に将来を約束した井筒の蔭に隠れて見えなくなってしまう。

6

《下段に概略》

6 里女の物語

今の出来事を不思議に思った僧は、その土地にまつわる業平と紀の有常の娘に関する物語を在原寺に参詣してきた里人から聞く。里人は僧にあらためて業平夫婦の弔いを勧める。

〔里人は、業平が幼い頃、紀の有常の娘と井筒に影を写して遊んだこと、成人してから、
「井筒」の歌を詠み交わして夫婦になったこと、その後、一時、業平が高安の女のもとに通うようになったが、有常の娘の「風吹けば…」の歌を聞いて、もとの仲にもどったことを語る〕

7 僧の待受

僧は業平と紀有常の娘の物語を夢で見ようと、仮寝をして待つ。

僧 夜も更け、月もいつそう輝きを増したこの在原寺で、業平の昔を夢に見るのを期待して、衣を返して仮寝をして、庭の苔を筵として横になろう。

8 【二声】

〈サシ〉

シテ、あだなりと名にこそ立てれ桜花、年に稀なる人も待ちけり、かやうに詠みしもわれなれば、人待つ女とも言はれしなり、われ井筒の昔より、真弓櫛弓年を経て、今は亡き世に業平の、形見の直衣身に触れて

8 紀有常の娘の亡霊の登場

紀の有常の娘の亡霊が、業平の形見の冠、直衣を身につけて僧の前に現われる。

有常娘 歌に、「桜はすぐ散るので、あてにならないという定評がありますが、その桜よりあてにならないのはあなたで、わたくしは年にまれにしかいらつしやらないあなたを待つ

蕉葉しゅうはの、夢も破れて覚めにけり、夢は破れ明けにけり

姿です。

ああ、こうして見るにつけ、懐かしさが募ります。水に映っているのは、わたくし自身の姿なのですが、見るにつけて、懐かしさが募るばかりです。

こうして、亡き有常の娘の亡霊の姿は、萎れた花が色褪せて匂いだけが残っている風情だったが、やがて、在原寺の鐘の音がかすかに聞こえ、秋の夜もほのぼのと明けてきて、古寺の松風が芭蕉葉に吹いてきて、僧の夢もさめたのだった。

9

〈一セイ〉

シテ、恥づかしや、昔男に移り舞地、雪を廻らす、花の袖

《序ノ舞》

〈ワカ〉

シテ、ここに来て、昔ぞ返す、在原の地、寺井に澄める、月ぞさやけき、月ぞさやけき

ていたのです」と詠まれています。こう詠んだのはじつはわたくしです。それで、「人待つ女」とも言われているのです。わたくしが井筒のまわりで遊んだ昔からはずいぶん時間が経過して、今はすでにこの世にはなき身となっていますが、業平の形見の直衣を身につけてまいりました。

9 紀有常の娘の亡霊の舞

有常の娘の亡霊は月下の在原寺で、業平を追懐して舞を舞う。

紀有常の娘 恥づかしながら、「昔男」の姿で、美しい花のような袖を翻して舞を舞うことにいたします。

《紀の有常の娘の亡霊は、業平と一体になったかのように深い懐旧の情にひたつて静かに舞を舞う》

紀有常の娘 この場に戻って来て、昔のことを思っていると、在原寺の寺井に映っている月は、じつに清澄そのものです。

10 終曲

有常の娘の亡霊は引き続き懐旧の情にひたるが、井の水に映ったわが姿をみて、いつそう懐旧の念を強くするうち、秋の夜が明けて、僧の夢もさめる。

10

〈□〉

シテ、月やあらぬ、春や昔と詠めしも、いつの頃ぞや

〈ノリ地〉
シテ、筒井筒
地、筒井筒、井筒にかけし
シテ、まろが丈
地、生ひにけらしな
シテ、老いにけるぞや
地、さながら見みえし、昔男の、冠直衣は、女とも見えず、男なりけり、業平の面影

〈歌〉
シテ、見れば懐かしや
地、われながら懐かしや、亡婦魄霊の姿は、萎める花の、色無うて匂ひ、残りて在原の寺の鐘もほのぼのと、明くれば古寺の、松風や芭

『井筒』鑑賞のために ― 詞章・現代語訳についてのメモ

- ◆ 演出の都合により詞章に省略・異同がある場合がございます。
- ◆ この『井筒』の詞章は観世流のものです。ワキの詞章は下掛り宝生流、アイの詞章は和泉流のものに拠っています。
- ◆ 【名ノリ笛】【次第】【二声】は人物の登場楽（囃子）です。
- ◆ 詞章冒頭の〈上ゲ歌〉〈一セイ〉〈サシ〉〈問答〉などは、当該箇所の曲節の名称です。また、〈□〉は類型的ではない節を仮にこの形で表したものです。
- ◆ 詞章で、が付された箇所は韻文のフシ、が付された箇所は散文のコトバです。
- ◆ 掛詞と認められる箇所にはもうひとつの意味を左肩に漢字で小さく記しています。
- ◆ 詞章に「地」とされている部分は、戯曲上は大別して、
 - ① シテのセリフ
 - ② ワキのセリフ
 - ③ 叙事文（小説で言えば「地の文」）の三種があるので、現代語訳にさいしては、そのいずれか判断して訳しています。また、③叙事文の箇所の現代語訳は二字下げにしております。